

「小・中学校外国語科における各学年の学習到達目標（例）」及び 「小学校外国語活動における各学年の目標（例）」を作成する際の5つのポイント

令和7年2月 岐阜県教育委員会

令和6年度に小学校の教科書が、令和7年度に中学校の教科書が改訂されました。このたび、すでに学校で作成されている学習到達目標を見直す際の参考となるよう、外国語科における学習到達目標（例）や外国語活動における目標（例）とともに、それらを作成する際の5つのポイントを作成しました。

つきましては、校内及び校区内の教員と共通理解を図るとともに、設定されている学習到達目標の改善・共有等に活用願います。

《参考資料》

【文部科学省】「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」（平成25年3月）

【文部科学省】mextchannel「Can-Do 形式の学習到達目標作成とその活用」

【文部科学省】小学校学習指導要領 解説 外国語活動・外国語科

【文部科学省】中学校学習指導要領 解説 外国語科

【国立教育政策研究所】「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 外国語

【国立教育政策研究所】「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校 外国語活動・外国語

Q1 「学習到達目標」とは何ですか。

A1 「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」、「書くこと」の五つの領域ごとに、また、学年ごとに、「～することができる」という能力記述文で設定された目標のことです。

※外国語科では、学習指導要領において言語「英語」の目標を五つの領域別で示しており、学年ごとの目標を示していません。学習指導要領「指導計画の作成及び内容の取扱い」には、各学校において学年ごとの目標を設定することと記載されています。（『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料、以下「学習評価参考資料」の p.38 参照）

【根拠】（中学校学習指導要領 解説 外国語編 p.17）

各学校において作成される学習到達目標は、五つの領域別の目標を踏まえながら、第2の2に記述された、より具体的な言語材料と言語活動を統合して設定されたものにするのが望ましい。

【根拠】（学習評価参考資料 小学校及び中学校 p.38）

学年ごとの目標及び評価規準の設定

- ・各学校においては、「教科の目標」及び「領域別の目標」に基づき、各学校における生徒の発達の段階と実情を踏まえ、「学年ごとの目標」を適切に定める。
- ・五つの領域別の「学年ごとの目標」は、領域別の目標を踏まえると、各々を資質・能力の三つの柱に分けずに一文の能力記述文で示すことが基本的な形となる。なお、五つの領域別の「学年ごとの目標」の設定は、これまでも中学校・高等学校においては「CAN-DOリスト形式」による学習到達目標の作成及び活用として、すでに各学校で行われてきたところである。

Q2 なぜ「学習到達目標」を設定することが大切なのか。

A2 以下の3つの理由があります。

- (1) 見通しをもった指導と評価を行うことで、指導改善に生かす。
- (2) 児童生徒と目標等を共有することで、学習改善に生かす。
- (3) 校内や校区内の教員と目標等を共有することで、小中7年間を通して資質・能力を育成する。

【根拠】(各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き pp.25-26)

2. 「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標を設定すると、どのような効果があるのですか。

(答) 実際の言語使用場面で言語を使って何ができるかということを見通した指導と評価を行うことができるようになります。例えば、学習到達目標を「簡単な物語文を読んで、概要を口頭で述べるができる」と設定した場合、その目標が達成される可能性を高くするような指導を計画し、実施することになります。したがって、教科書のどの単元をいつ教えるかといった時間軸に沿った指導にとどまらず、目標を達成するために教科書の活用の仕方を工夫しつつ、教科書以外の教材も加えるなどして、言語活動を計画し、授業を実際のコミュニケーションの場とすることができます。(中略)さらに、学習到達目標を設定するにあたって、外国語科担当教員等全員が参加するとともに、目標を設定した後も、実際の授業における言語活動の計画や言語活動を効果的に行うための教材の準備、指導方法や評価方法の共有等にあたって協力し続けることにより、外国語科担当教員等のチームワークや学校としての指導力が高まることも期待されます。また、教員と生徒が外国語学習の目標を共有することによって、生徒自身にも、言語を用いて「～ができるようになりたい」、「～ができるようになることを目指す」といった自覚が芽生え、言語習得に必要な自律的学習者としての態度・姿勢が身に付くとともに、「言語を用いて～ができるようになった」という達成感による学習意欲の更なる向上にもつながることが期待されます。

※校区内の先生方と、学習到達目標について話し合う場合、次のような対話が期待されます。大切なことは、地域に生きる子どもたちにどんな力を付けたいのか、そのためにはどんな指導が必要なのかを話し合い共通理解を図ることです。また、その際、使用している教科書を見合い、どのような学習に取り組んでいるかを理解することも大切です。

子どもたちには、大人になったときに、この町に誇りをもって、英語で堂々と話すことができるようになってほしいです。

中学校では、●年生のときに、地域の特色、そこでできること、また、その歴史について詳しく発表する単元がありますよ。

小学校の教科書には、●年生の Unit●で地域の様子を伝える単元がありますが、中学校ではどうですか。

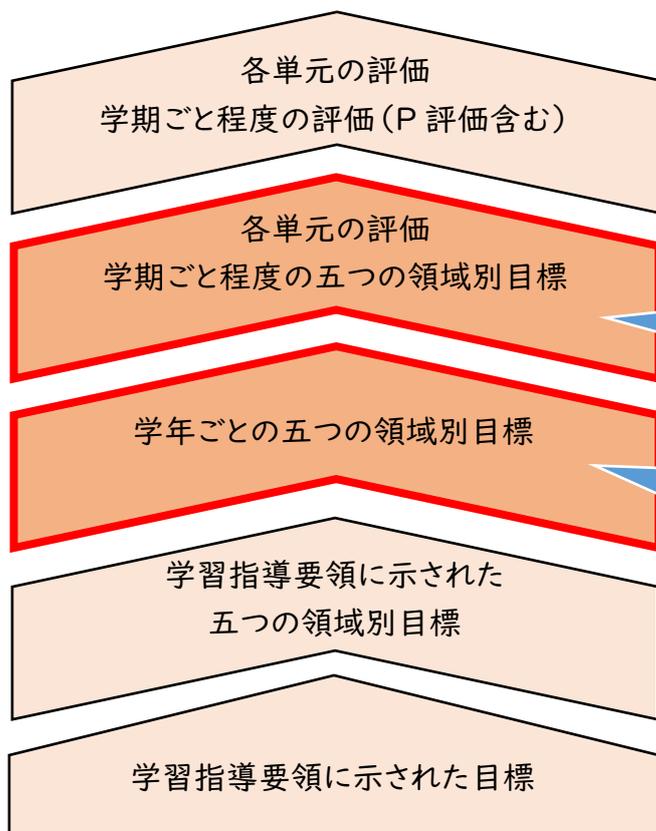
似たような言語活動になってしまいうけど、そこで子どもたちが話す英語にはどんな違いがあるのかな。教科書を見せてもらえませんか。



Q3 「学習到達目標」は、何を基に設定すればよいですか。

A3 学習指導要領に記されている五つの領域別目標を参考に、目の前の児童生徒の実態と、使用している教科書に扱われている題材や設定されている言語活動などに合わせて、「学年ごとの領域別学習到達目標」を設定しましょう。

学習者の学習改善につながるもの
教師の指導改善につながるもの



教科書の題材や言語材料などを踏まえて設定する。また、児童と共通理解を図る。

目の前の子どもの実態に合わせて、また、教科書に設定された題材などに合わせて設定する。

「【文部科学省 nextchannel】Can-Do形式の学習到達目標作成とその活用」を参考に作成

Q4 「学年ごとの学習到達目標」と「単元の目標」として書かれる文の構成要素の違いは何ですか。

A4 「学年ごとの学習到達目標」は、基本的に「何について(話題)」、「どうすることができる(内容)」の2つを記載します。

一方、「単元の目標」は、基本的に「何のために(目的)」、「何について(話題)」、「どうすることができる(内容)」の3つが必要です。

【根拠】「学習評価参考資料」には、次のように、「学年ごとの領域別学習到達目標(例)」と「単元の目標(例)」が記載されています。

	<p>「何のために(目的)」を二重線(=)、<u>「何について(話題)」を波線(〰)</u>、「<u>どうすることが</u>できる(内容)」を直線(—)で示しています。</p>
<p>中学校 外国語</p> <p>【事例1】 pp.47-55</p>	<p>「話すこと[やり取り]」における第3学年の学習到達目標(例) <u>日常的な話題や社会的な話題に関して、聞いたり、読んだりしたことについて</u> 事実 <u>や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて伝え合うことができる。</u></p> <p>単元の目標(例) <u>友達の意見等を踏まえた自分の考えや感想をまとめるために、野菜の歴史について</u> <u>書かれた英文を読み、読んだことを基に考えたことや感じたことを、英文を引用したり</u> <u>内容に言及したりしながら伝え合うことができる。</u></p>
<p>中学校 外国語</p> <p>【事例3】 pp.63-70</p>	<p>「聞くこと」における第3学年の学習到達目標(例) <u>はっきりと話されれば、日常的な話題について、必要な情報を聞き取ったり話の概</u> <u>要を捉えたりすることができるとともに、社会的な話題について、話の要点を捉えること</u> <u>ができる。</u></p> <p>単元の目標(例) <u>自分のことをよりよく知ってもらうために、自分が好きな言葉</u> <u>をテーマとしたスピー</u> <u>チをしたり、級友のスピーチや教科書本文を聞いて要点を聞き取ったりすることができ</u> <u>る。</u></p>
<p>中学校 外国語</p> <p>【事例4】 pp.71-78</p>	<p>「書くこと」における第1学年の学習到達目標(例) <u>自分や身の周りの人物、身近な物事について、事実や自分の考え、気持ちなどを</u> <u>整理し、簡単な語句や文を用いて紹介する文章を書くことができる。</u></p> <p>単元の目標(例) <u>学校ホームページのアクセス数を増やすために、他の学校を紹介するメールを</u> <u>読んだり、学校行事や部活動等について</u> 事実や自分の考えを整理し、簡単な語句や文 <u>を用いてまとまりのある文章を書いたりすることができる。</u></p>
<p>小学校 外国語</p> <p>【事例1】 pp.45-57</p>	<p>単元の目標(例) <u>自分のことをよく知ってもらったり相手のことをよく知ったりするために、相手の誕生日</u> <u>や好きなもの、欲しいものなど、具体的な情報を聞き取ったり、誕生日や好きなもの、</u> <u>欲しいものなどについて</u> 伝え合ったりできる。 <u>また、アルファベットの活字体の大文字を</u> <u>書くことができる。</u></p>
<p>小学校 外国語活動</p> <p>【事例5】 pp.88-91</p>	<p>単元の目標(例) <u>学級の友達に感謝の気持ちを伝えるカードを作るために、相手に伝わるように工夫</u> <u>しながら、色や形など、身の回りの物について、欲しいものを</u> 尋ねたり答えたりして <u>伝え合う。</u></p>

Q5 「学習到達目標」として設定した各領域の目標については、全ての単元で評価しなければなりませんか。

A5 各単元で、5領域について全ての学習評価の観点で記録に残す評価を行うことは現実的ではありません。単元の題材や単元に設定された言語活動などに合わせて、評価する領域と観点を選択し、年間で計画を立てる必要があります。

【根拠】(学習評価参考資料 小学校及び中学校 p.38)

単元ごとの目標及び評価規準の設定

- ・単元ごとの目標は、学年ごとの目標を踏まえて設定する。
- ・単元ごとの評価規準は、「内容のまとまり(五つの領域)ごとの評価規準」「学年ごとの評価規準」と同様に、単元ごとの目標を踏まえて設定する。
- ・単元ごとの目標及び評価規準は、各単元で取り扱う題材、言語の特徴やきまりに関する事項(言語材料)、当該単元の中心となる言語活動において設定するコミュニケーションを行う目的や場面、状況など、また、取り扱う話題などに即して設定することになる。

※別添の例には、各学年の領域別学習到達目標の下に、「記録に残す評価を行う単元」を位置付けました。

※どの領域について記録に残すかについては、単元で取り扱う題材や設定されている言語活動等を踏まえ、単元の目標を設定した上で位置付けました。

小学校第5学年における記録に残す評価を行う単元

	聞くこと	読むこと	話すこと[やり取り]	話すこと[発表]	書くこと
Unit 1			● [ア]	● [ア]	
Unit 2	● [ア]		● [ア]		
Unit 3	● [ア]		● [ア]		
Check Your Steps 1				● [イ]	
Unit 4	● [イ]		● [イ]		
Unit 5	● [イ]		● [ア]		
Unit 6		● [イ]	● [ア]		
Check Your Steps 2				● [ウ]	● [ア]
Unit 7	● [イ]		● [ウ]		
Unit 8			● [ウ]	● [イ]	
Check Your Steps 3			● [ウ]		

互いの名前や好きなものを伝え合い自己紹介をする活動を行う。
誕生日やほしいものなど、簡単な語句を聞き取ったり、伝え合ったりする活動を行う。
できることやできないことなど、基本的な表現を聞き取ったり、伝え合ったりする活動を行う。
好きなものや欲しいものなど、伝える情報を整理した上で、声、表情、スピードなどを工夫しながらスピーチをする活動を行う。
身近な人について、できることなどの具体的な情報を聞き取ったり、より詳しい情報を伝え合ったりする活動を行う。
行きたい場所までの行き方を聞き取ったり、基本的な表現を用いて道案内をしたり、それに応じたりする活動を行う。
メニューなどから自分が必要とする情報を得たり、基本的な表現を用いて注文したり会計したりする活動を行う。
おすすめの場所について、内容を整理した上で、伝え方を工夫して紹介したり書いたりする活動を行う。
日本各地の魅力などについて、具体的な情報を聞き取ったり、内容を整理した上で、事実と自分の気持ちを伝えたりする活動を行う。
自分の日常生活やあこがれの人物について、内容を順序付けて話したり、慣れ親しんだ表現を書いたりする活動を行う。
「日本のすてき」について、内容を整理した上で、自分の気持ちを入れたり伝え方を工夫したりしてスピーチをする活動を行う。

※ただし、小学校第5学年における「読むこと」の「ア」と「書くこと」の「ア」については、**初学初期段階であることを踏まえ、特定の単元のみで記録に残すことはせず、年間を通じて、もしくは複数の単元にわたって記録することが妥当である。**

小学校第5学年を例に挙げると、一つの単元において、複数の領域の評価を記録として残すよう計画しました。ただし、これらはあくまで例示であり、教科書会社の作成した指導計画とは異なる箇所があります。各学校において作成する場合には、児童生徒の実態や教科書の題材等を踏まえ、この例示の通りである必要はありません。